

伝えたい、伝統芸能の心

高森町伝統芸能連絡協議会会長 本田 研一

今、発掘作業がおこなわれています。

それは弥生時代中期から後期にかけての遺跡。およそ二千年前から千八百年前にかけて栄えた、集落跡です。発掘される一つ一つの遺物には、南北九州の特徴的な造りといえるものが見受けられ、それは交流によってなしたものであるばかりか、朝鮮半島の影響下にあった、鉄製のものまで発見されています。

ここは幅・津留遺跡。毎年八千件にのぼる日本国内の発掘調査のなかで、文化庁編集による「発掘された日本列島2013新発見考古速報」に紹介されており、国が認めた重要な遺跡であります。

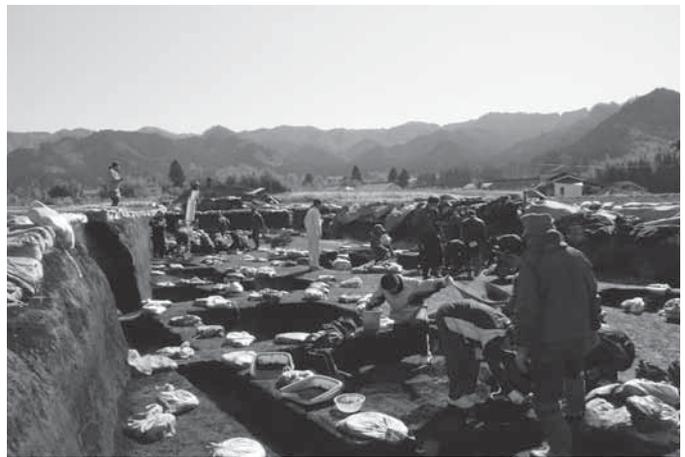
幅・津留遺跡の地理的概況等を説明しますと、それは南阿蘇村を經由して延びる、道路工事に伴う事前調査によって発見されました。ちなみに、「幅」とは南阿蘇村の小字名です。

幅・津留遺跡の近くを沿うように流れる冬野川は、やがて段下に位置する南阿蘇村の市下神社横へ流れます。その市下神社の門柱から眺めると、真正面に幅・津留遺跡が見えます。この門柱から直線上に、遺跡が存在します。

東西に発掘調査が進む中、すでに西部の南阿蘇村側は終了し、舗装された道路が走っています。今は高森町側、津留地区が発掘されています。

この発掘現場からは、根子岳、阿蘇の山々、そして立野まで四方を見渡す事ができ、要塞として重要な位置にあったことを、伺い知ることができます。

しかし東西に分けた発掘過程で、西側のムラは環濠を備え、外部からは容易には侵入できないようになっていました。一方、東のムラには区画溝があり、いつでも入っていきける浅いものでした。東のムラが形成さ



▲発掘作業が進む幅・津留遺跡（高森・津留）

れたときには激しい戦いはなかったのかもしれない。

出土遺物から東・西のムラで使用していた道具が異なっていたことがわかりました。西のムラでは磨きあげた矢尻など石の道具が中心で、東のムラでは鉄の道具が中心でした。このことから、西のムラから東のムラへと移り住んだと考えられます。ここまではつきりと道具の変遷がわかる遺跡は大変珍しいそうです。

東のムラ、すなわち津留地区の特徴として、鉄製の道具が多く発見さ

れています。石器が多く使用されていた西のムラに比べると、外部からの文化的な進入あるいは交流がより進歩し、朝鮮半島との直接的な交流があったのかもしれない。

もっと大規模な鉄を作る作業場でも見つければと、思っています

幅・津留遺跡の特徴は、九州の中央部、阿蘇カルデラ内にある弥生時代中期から後期の大集落です。カルデラ内の南の平野部では最も高い東端にあり、周囲に点在する弥生集落を一望できます。

幅・津留遺跡は、弥生中期から後期にかけて発展してきました。その後の古墳時代につくられた墓地が、高森中央小学校で発見され、現在含蔵寺に太刀等が保管されています。このように、本町には幅・津留遺跡から発したであろう、多くの遺産がのこっています。

やがて道路となるであろう、この貴重な遺産を後世に残すには、どうしたらいいのでしょうか。

（参考）文化庁編・「発掘された日本列島2013新発見考古速報」